

平成26年度

「第5回市民参加と協働のまちづくりフォーラム」

～ずく出せ大町みんなが主役～

趣 旨

かつてのように、行政だけがまちづくりを担当してきた時代は終わり、これからは、幅広い市民団体の皆さんと行政、また市民団体同士がお互いに協力しあってまちづくりに取り組むことが求められています。

まちづくりは身近でできることから始める実践活動の積み重ねが大切であり、現在、大町市が取り組んでいる「市民参加と協働のまちづくり」は、市民の皆さんの主体的な取り組みと行政の力がタイアップすることにより、より高い成果を目指すものです。

今回のフォーラムでは、「ふるさとがえり」の映画鑑賞をきっかけに、ふるさと・郷土への思いと向き合う中から、まちづくりの気運を高めるとともに、きらり輝く大町の創造に向かい、様々な世代の方、団体関係者が協働してまちづくりを推進する必要性を語り合う機会とします。

映画上映 「ふるさとがえり」

【映画 ふるさとがえり紹介】

(上映時間：135分) 制作：ものがたり法人 Fier Works

《映画ストーリー（抜粋）》

「あなたにとって、“ふるさと”とは何ですか？」
1990年、ある夏の日に、亀を助けた四人の少年。
2010年、映画の助監督を辞め、帰郷することになった主人公・勘治。
ふるさとを舞台に、二つの時代・物語が交差しながら進行していく。
消防団活動に巻き込まれる勘治は、少年時代の仲間たちが
「地域の平和」のために生きている姿を目の当たりにする。
一方少年カンジは、仲間たちと「ふるさとの平和を守る亀の子団」を結成。
ただただ遊び呆ける日々の中、夢中で描いた「竜宮伝説」という
冒険物語のスケッチブックや、お寺の映画上映会の体験などを通じて、
「映画監督」になる夢を抱く。
志半ばとなった「少年時代の夢」－
今まで振り返りもしなかった「田舎の現実」－
20年の時を超えて、「ふるさと」への愛情と葛藤が交錯していくのだった・・・。
「私たちは物語を生きている。」
カンジが描いた「ふるさと物語」を通じて、その想いを届けていく。

ミニワークショップ

参加者を10グループに分けて、ミニワークショップを開催

進行：市役所若手職員

『進め方』

- ①映画上映を見た上での感想や日頃の思いとして、あなたにとっての「ふるさと（大町市）」を一言で表すと。（大町以外の方は、大町への思いを記入。）
- ②出されたシートの内容を題材にして意見交換を展開。
※その他として、各団体の立場からの意見を出してもらったり、大町市外からこられた方たちが、住みたくなる「ふるさと大町市」にするためには。
- ③ふるさと（大町市）が今後、魅力ある、活力あるふるさととして、歩いていくために自分として何ができるかを付箋へ記入していただく。（大町以外の方は、大町に望むもの等を記入。）
- ④記入した付箋の内容を一人ずつ語り、机の上の「ふるさと これからの大町市へ」の木が描かれているシートに貼ってもらう。

- ・・・本日の映画のストーリーやワークショップで出された様々な意見を、それぞれの今後の活動や行動をする上での契機としていただき、人と人との繋がりを大切に、活力と魅力あるふるさと「おおまち」の創造にひと役かっただけを願って。

私にとって『ふるさと』とは・・・

- 実家が大町市 ○安心する、居心地がいいところ ○心が休まる住みたいところ ○生まれた所
- 大町市 ○心のよりどころ ○山、川、湖のあるところ ○家族・友達のいる場所
- 心の故郷であり、育ててくれた所。師と思っている ○アイデンティティの原点、守りたい風景
- 心が安らぐ場所、帰りたくなる場所 ○生活 ○山河 ○心の宝物 ○若者が元気で働ける町
- 「おかえり」と言ってもらえる場所 ○一番最初に人生が始まったところ ○仁科三湖
- 常にスタートに戻る所 ○帰りたいたいと思える場所 ○家族、友達
- いくつあってもいいもの。ひとりひとりの物語（ストーリー）の宝庫。一十人+町=大町（一人が集まると町ができる） ○みんなが一つのまとまり。子ども・大人・年を取ってもいたい場所
- 住みやすい場所。みんながいる場所 ○誰かに「頼る」ことができる場所 ○宝
- 地域の人々の中の一員で生き抜くこと ○自然と「帰ってきた！」と思える場所 ○かえる所
- 安心する所 ○生まれた所 ○安心して生活できる場所 ○牛小屋のにおい
- おちつける場所 ○共に生きる場所 ○人とのつながりあい ○変わらない風景
- 日本で1番いいところ！ ○いつでも帰れる暖かい場所 ○帰って来られる場所
- 心、身体のよりどころ。ここで死にたい、人生を終えるにたる所 ○育むもの ○落ちつく場所

【テーブルNO. 1】



【1班】

【テーブルNO. 2】

参加者 9人 女性3人、男性6人、うち学生2人、消防団2人

(内容)

- ① 各自シートへ自分にとっての「ふるさと」とは、となげかけ記入してもらい、自己紹介しながら発表してもらう。
 - ・安心できる場所 ・山、川、湖 ・心のよりどころ ・小さかった頃の思い出など、人によってふるさとのとらえ方が様々で興味深く感じました。
- ② シートに記入してあることについて意見交換。
 - ・学生の二人は大町に4年前に引っ越してきた、松本から大町高に通っている、とのことで、二人とも「大町の人はずれ違う時とかあいさつをしてくれて、これは都会ではあまりないことで素晴らしい」と話していました。
 - ・静かなところが大町のいいところ。
 - ・市民の森、鷹狩山、観音橋など観光に適しているところがある。
 - ・商店街の内装にも力をいれて、魅力ある商店街づくり
 - ・大町には職がない、特殊な技術（農業、芸術など）がないと移住は難しいのも事実。
 - ・学校の帰りに気軽に寄れるお店が欲しい。→デリシア、ココスのほかにも。町高生ははっちゃんへよく行くとか。
 - ・やめる勇気も必要。新しい事業などを始めるには、切り捨てていかなければならないこともあると思う。
- ③ 付箋にふるさとのために自分ができること、したいこと、ふるさとへの思いを記入してもらう。

内容は付箋のとおりです。

まとめ

年齢層も幅広く、いろいろな意見を聞くことができとても面白かったです。ワークショップの進行を担当させていただいたのは初めてで、意見が出ないときの沈黙もあり、少し戸惑ってしまいました。

興味深い意見もたくさんいただき、私自身とても勉強になりました。

映画の感想についてあまりふれることができませんでしたが、重たい空気になることはなくてよかったです。

学生の二人にもっと話す時間が取ればよかったのですが、うまくいきませんでした。



【2班】

【テーブルNO. 3】

人数8名 10代～60代 男性6名 女性2名

自治会関係…2名 市民活動関係…2名 消防団…1名 中学生…2名 進行役…1名 欠席…2名

(内容)

はじめに…プラカードに記載されていたワークショップのルールを全体で確認。ワークショップにはじめて参加する人が多かったため、ワークショップの趣旨などを簡単に説明した。

自己紹介…①名前と普段何をしているか ②フォーラムに参加した理由は？ ③映画の感想と、あなたが思うふるさととは？

話しやすい雰囲気づくりのため、個人の自己紹介もしていただきました。

①については参加名簿の通り

②フォーラムに参加した理由

・自治会に参加しない人が増えていたり、高齢化が進んでいることを危惧している。新しいアイデアが生まれるきっかけになればと思った。

・大町市内の団体や、個人をつなぐための活動をしている。このフォーラムの趣旨に共感したから。

・普段学校の中で、自分のまちについて話すこともないので、このような場に出てみようと思った。

・生まれは大町だが長くふるさとを離れていた。戻ってきてやっとなふるさとに恩返しができるかと思っている。

・消防団の一員として、災害時だけでなく普段から地域の人たちと交流していくことが大切だと思っている。

③映画の感想、ふるさととは

・人生そのもの 自分をつくりあげたもの…映画の主人公たちと同じように、私たち其々にふるさとの思い出がある。ふるさととは自分を育てくれる。自分の人生そのものと言っても過言ではないと思う。

・家族・友人がいる場所… 自分はまだ大町を出たことがないけれど、映画の主人公がそうだったように、ふるさとを離れる経験をすれば、きっと家族や友人の顔を思い浮かべられるだろうと思った。

- ・日本で一番いい良いところ…ここ以外に暮らしたいところなんて思い浮かばない。＝日本中で一番いい場所だと言えと思った。是非、市外・県外の人にも大町の魅力を伝えたいと思う。
- ・落ち着ける居心地がよい場所…主人公たちの消防活動は共感するところが多く、感動して泣いてしまった。地域の絆があるから、安心して暮らせる。心が安らぐ場所なんだと思った。
- ・第2のふるさと…山村留学で物心つく前から八坂にやってきた自分にとっては、ふるさとはどこなんだろう？と感じていた。でも映画を見て、自分にとって大切な友人がいたり、好きな景色がある八坂が心のふるさとだと思えた。

(トークタイム)

話題になったことや、出された意見・アイデアなど

- ・個人的に薪に興味がある。薪は一般的には広葉樹を用いるが、針葉樹でも作れる。大町は雄大な山林があるので、そこにある針葉樹を使った薪で新たなビジネスができるのではないか。働く場所の拡大にもなるのでは。
- ・大町には黒部ダム建設など、すごい歴史がたくさんある。若い人たちはどこまでふるさとのことを知っているのか。是非、勉強してほしいと思う。
- ・中学校同士の交流はほとんどない。学校を越えて、同い年でふるさとについて語り合えるようになったら面白いと思う。
- ・大町の歴史や郷土食について、勉強会など開催されている。大町は積極的な活動をしている方だと思う。もっと参加者が増えるように情報発信やアピール方法を考えたい。

(ワークショップを振り返って)

テーブル3は偶然にも、大町出身ではない人が多かったです。または、長くふるさとを離れていたが、戻ってきたという人。外を知って、大町の自然や人の魅力に気付いたという意見が出ていました。

個人の興味ある分野から、薪を使った新規ビジネスの話になった時は会話が専門的になりすぎて、中学生が入れなかった(聞いていて勉強になったのかもしれませんが…)ところが気になりました。その時は知識のある2人が対話している感じだったので、“全体に向けて話す”という意識を上手く共有できていなかったかな、と自分の力不足を感じました。

全体的に話し合いの雰囲気は、ご年配の方が中学生に期待を寄せている感じでした。今後、中学生や高校生、大学生の参加者をもっと巻き込めたらさらに面白くなりそうだと思います。



【3班】

【テーブルNO. 4】

人数 9名 10代～60代 女性 3名、男性 6名

(内容)

①「あなたにとってふるさととは。(大町市に対して思うところ)」

- ・ あって当たり前のところ。 ・ 家族がいるところ。 ・ 自然が豊か。(標高の高い山や川)
- ・ 子どもを育てやすい環境。

②上記をもとに意見交換。

- ・ 大町市の外に出たことで、大町市の環境の良さに気付くことができた。
- ・ いわゆる雷親父のような人が近所にいなくなった。前は、地域で子どもを見ている雰囲気があったが、最近では他人の子どもを怒るとその子どもの親から文句を言われる。そういった環境もあり、他人の子に対して無関心になってきていると思う。
- ・ 近所づきあいが前より希薄になっている。
- ・ 最近では、学校の指導もあって小中学生が通学路で会う地域の人たちに対して挨拶してきてくれる。すごくいいことだと思う。
- ・ 中学生になって、友達と外で遊ぶことが少なくなった。部活に入って時間がなくなったのもあるかもしれない。
- ・ 今の町は環境を取るか生活を取るかという選択に迫られる。自然環境がどんなに良くて魅力的でも、仕事しなければ生きていけない。こういったことが、若い世代が大町市に戻ってくるのにネックになっている部分では。

③「ふるさとのために自分ができること、したいこと」

- ・ 中学生の職場体験で、建設業の業者が手を挙げているところがないと思うので、サービス業だけでなく幅広い分野で職場体験をしてもらって身近に感じてもらいたい。
- ・ 自分が大町市に住み続けることで、知り合いが大町市に来る。大町市に知り合いがいなければ、ここに来る理由がないと思うので……。なので、住み続けたい。
- ・ イベントに参加してみる。こういったイベントに参加することで、関わりのない世代とも関われる。
- ・ 今山村留学で大町市に来ているが、また大町市に戻ってきたい。
- ・ 鷹狩山と北アルプスとをつなぐケーブルをつくりたい。

(まとめ)

- ・ 2つの問いとも難しかったようで、ペンが止まっている方が多かった。(今まで考えたこともないとか、いざ書けと言われると…というようなことをおっしゃっていた。)
- ・ 意見交換の30分は長く感じられた。
- ・ 誰か1人の独壇場にならず、テーブルについて参加者が均等に意見を言えていたので、色々な意見を聞くことができた。年配の参加者は中学生の意見に興味津々な様子だった。
- ・ 世代を超えて意見交換ができたことが好評だったようで、もっとこういった場に参加したいといった声も聞かれた。



【テーブルNO. 5】

(内容)

- ・ふるさととは、家族と共に住めるところ
- ・5班にはふるさと(大町)から離れたことがない人が多かった。
- ・若いころは都会に出たいと思ったことがあるが、結局住み続けて、年を取ってから気づく自然の良さ。
- ・中高生も自然の良さには気づいていて、よそへ出かけたとしても帰ってくるとほっとする。
- ・仕方なく住み続け、もう82歳。
- ・美麻は一段と人とのつながりが深くていいと思う。
- ・映画にもあったが、消防の泥臭さ、仲間意識はとても大切。人とのつながり、輪が広がったのは財産。
- ・実際に消防団の活動をしているが、昔は飲んだくれというイメージだったが最近はそれほどでもなく頑張っている。
- ・自治会、となりぐみ等、今の時代ないがしろになってきているが、まちづくりの基本は向こう三軒両隣との付き合いを大事にするところから始めないといけない。とんとんとんからりんととなりぐみ♪の歌を昔は子供の時から覚えさせられた。(中高生は聞いたこともないそうです。)村八分(これもあまり聞いたことがないそうです。)という言葉があるが、残りの二分はとなりぐみ?大事にしないとイケない。
- ・老けない、ボケないためには外の集まりに出かけて行って、意見交換会をやる。人と話すことはいいこと。(こういったフォーラムの機会にも参加して言いたいこと言ってくれる。)
- ・昔の大町の栄えていたころから学び取ることがあるはずなので、過去を勉強するべき。
- ・中高生は現在の時点で自分の将来の夢をかなえるためには大町より外へ出て行かないといけない。ふるすとは好きだが住み続けられない理由がある。選択肢が少ない。仕事がない。夢をかなえるのはここでは難しい。
- ・映画でも「男なら東京へでろ!」とじいちゃんが言っていた。でかい夢をかなえるのもいいことだ。
- ・孫が戻ってきているが、ふるさとには友達が少ない(みんなない?)のでまたいつ荷物をまとめて出て行ってしまいかかわからない。人間関係、友達は重大な要素である。(ふるさとに帰ればみんないると思っていたので、逆の認識もあると気づく。)

* 続いて個人の感想です。

- ・youth サミットは若者中心で若者に語ってもらうことがメインだったので、今回は年齢層が高く、やはり中高生はおとなしめになってしまった気がした。また20代の大学生くらいになればもう少し積極的に話せるのかもしれない。
- ・いろんな世代が交流できる場を設けるのはよかったと思う。お年寄りの意見も聞けて勉強になった。
- ・学生が(古い?)言葉を知らなかったり、大人がカタカナ語(ワークショップ、フォーラム等)がわからなかったり、私もサミットのときにカタカナ語ばかりでよくわからないと感じたので(ワールドカフェのワークショップの前にアイスブレイクでブレインストーミングです。)、新しいしゃれた感じを出すのもいいけど「ふるさと」らしく日本語を使うようにすればもっと和やかになるのではないかと思った。
- ・市の職員として、市民の方に挨拶したり、顔を覚えてもらったり、いい機会だったと思う。



【5班】

【テーブルNO. 6】



【6班】

【テーブルNO. 7】

(内容)

- ・ 今回のまちづくりフォーラムと体育協会創立60周年記念公園のようにイベントの重複をやめてほしい。市で調整とれるはずでは？
- ・ 人口増加を求む。
産婦人科を早急に復活させるべき。お産を近くの病院で出来ないのはとても不安。定住に大きくマイナス。
- ・ 八坂・美麻の教育は素晴らしい。仲間意識が非常に高い。
山村留学生も多数おり、第二のふるさとになっている。
- ・ 地元の祭りが好き。地域の魅力の維持・向上のためにも、保存会などの活動に積極的に参加している。
皆にも参加して欲しい。
- ・ 「定住して欲しい」→「定住したい」へ。お願いよりも、魅力ある地域を創る。
- ・ 児童の溜まり場が無い。
一中生は、西友にまず集まってからビッグなどに遠出する。
仁中生は、特に学校以外に集まる場所はない。
美麻中は、生徒の半分以上が源流美麻太鼓をやっている。
昔は、映画のシーンのように良くも悪くも駄菓子屋みたいな商店が多く、良く子供たちで集まっていた。今は、商店街も空き店舗が目立ち、小さい商店はみんななくなってしまった。寂しい。
- ・ 乱雑に並んだ田んぼ、整備されていない水路、ホタルが飛び交って、虫の音がうるさかった田舎の風景が自分にとってのふるさと。現在は区画整備されて整然と並んだ田んぼ、U字溝の入った水路、ホタルがいなくなり、虫の音が少なくなった。昔の方が良かった。
↓
- ・ 整備された水路は安定した農業には欠かせない物。確かに昔の原風景からは遠ざかっているが、それが一概に悪いとは言えない。
- ・ 大町市の特色を活かした市立の大学や学校を創ってはどうか（山岳関係とかは？）。地元民はそのまま地元に残る人が多くなるし、市外からの転入者は増える。
- ・ 登山者に優しい街にしたらどうか。山は観光資源である。登山者の呼び込みに力を入れる。
- ・ 親の意識を定住に向けさせるべき。大町市や市長に何とかしろというのではなく、一人一人大町市の定住に

意識を向けるべき。子供に大町市に住むという1つの道を提案するくらいはできる。

↓

- ・親が嫌々消防団や地域の活動に参加したり、大町市をマイナスに話すと、当然子供は大町市を出ていくし、大町市に残っても、地域の活動を積極的にやらなくなる。親が大町市に誇りを持って欲しい。併せて行政も誇りの持てる大町市にしてほしい。



【7班】

【テーブルNO. 8】

人数 8名 10代～60代 女性1名、男性7名

(内容)

①はじめに自己紹介及び「ふるさとについて思うこと」を各自発表。

…参加者はなかなか思いつかず、特に学生さんが苦勞している様子だった。

時間になっても思いつかない方もいたため、急がせず、他の発表を聞いてもらいながら記入してもらった。

ふるさについては「変わらない風景」や「自然」など、大町市の特徴と重ねていた方がいた。

②上記をもとに意見交換。

…出された意見等

地域の人と人とのつながりが薄いのでこのような（まちづくりフォーラム）機会があれば良い。

消防団は訓練があつたり大変だけど今の時代は消防団しか若者のつながりを作れる組織はないのでは。若者にもっと参加してほしい。

若者が働く場がない。

現状の商店街には若い世代にとって魅力的な商店がない。

学生（中・高）で冬のスポーツをしている人は少ない。せっかく恵まれた環境なのにもったいない。理由は学業で忙しかったり、道具を揃えるのが大変で気軽にできない事がある。

③残り15分で「ふるさとのために自分ができること、したいこと」について付箋に記入、各自発表して簡単なまとめをし、終了した。

…内容は付箋のとおり。

以下、印象に残ったもの。

「中学校間で生徒同士の交流ができる機会がほしい」という中学校生の意見。

「若い人と話す機会は新鮮で貴重なので、また機会があれば参加したい」という年配男性の意見。

「市には、市民の声にもっと耳を傾けてほしい」とのご意見。

(まとめ)

今回、当グループの学生は結構意見を言う方だったので進行しやすく、また周りの参加者もきちんと意見を聞いてくれたので良かった。

実際、その学生のことを他の参加者が褒めていた。

何か答えを出すような意見集約はできなかったが、ふるさとについて考える良いきっかけになったと思う。

映画の結末には皆驚いていたが、重い雰囲気にならなかったのが良かった。



【8班】

【テーブルNO. 9】



【9班】

【テーブルNO.10】

参加者8名

【ふるさと】とは？

- ・人と人の原点
- ・帰りたい時に帰れる暖かい空間、人と人が繋がれる場所（都会ではコミュニケーションが取れない）
- ・幸せの場所（山がきれい、水が美味しい等、色々な幸せがある場所）
- ・恥ずかしくないところ（知人を連れてきても自慢出来るものが沢山ある）
- ・人それぞれの故郷であり、色々な良いところがある場所
- ・ほっとする場所だが、一部には面倒な面もある。地域の人たちと触れ合える場所

【大町市を帰って来なくなる場所にする】ためには？

- ・帰ってきたくても来れない。働く場所がない＝お金が無いので生活が出来ない。世帯の疎外感もあり一つになることが難しい。
- ・働くところが大切。コミュニケーションのまちづくり。社会に出るとコミュニケーションづくりが大切。若い人を育てていくにはコミュニケーションが必要。
- ・小さい頃から様々な体験をしてもらうことが大切。昔は自然に触れる機会が与えられた。その他にもロープの縛り方なども教わった。大人と子供と一緒に楽しめる様な機会づくりが必要。
- ・おばあちゃんがいる、小さい頃から助けられていた。悩みも聞いてもらった。
- ・薪割り等は学生みんながやっていた。今は、学校でも教えなくなったが、鎌の使い方などを若い人に教えるべき。
- ・今は便利すぎる。昔は遊びでも何でも自分達でそりを作ったりしたが、今の子どもたちはそういう遊びをしなくなった。
- ・ゲーム遊びが主になってしまった。
- ・心が弱くなっている。社会全体がそういう雰囲気になっている。大町はお菓子が美味しいのもっとアピールすれば良いと思う。
- ・子供のしつけがなっていない。常識がなくなっている。
- ・考える力が落ちてきている。
- ・市内の環境整備が必要。例えばイチョウ並木の雑草処理など。関係無いというスタイルではだめ。

【その他】後日、⑩テーブルの参加者から寄せられた感想

- ・もっと若い（30代～40代）特に自営業者等を参加させて欲しかった。
参加者の年齢層が高く、昔話的な内容になってしまったため、高校生の参加者がかわいそうだった。



【10班】

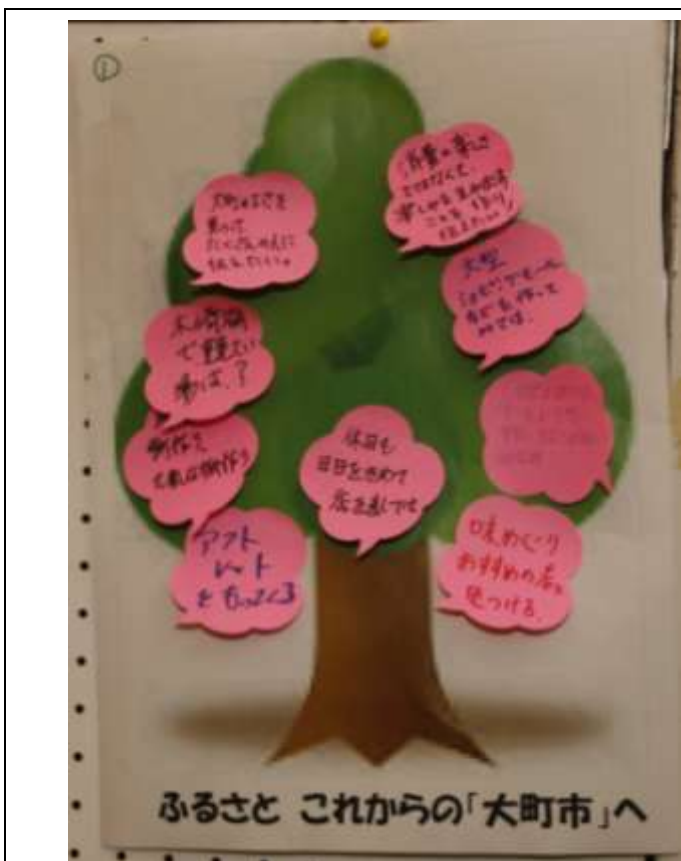


【フォーラム会場の様子】

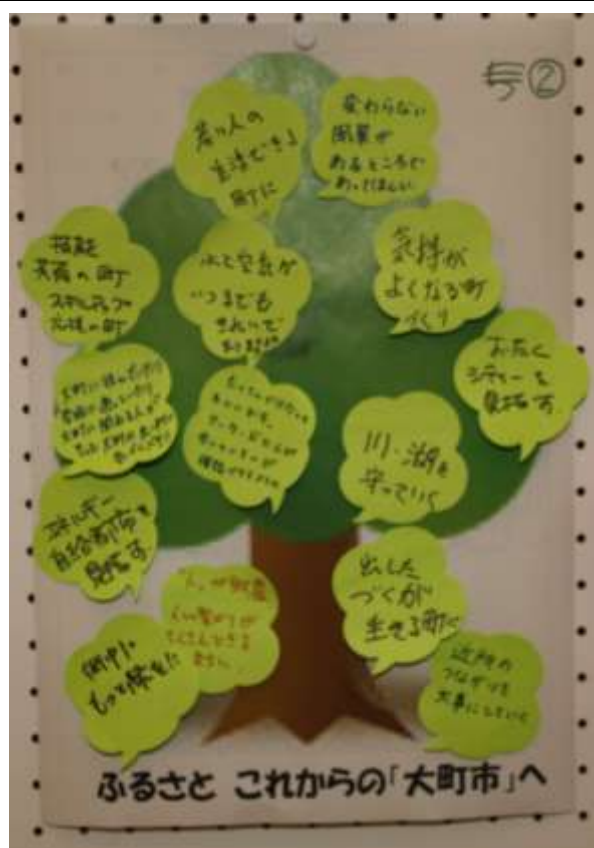


【大町市消防団の皆さん】

ふるさとのために自分ができること、したいこと、ふるさとへの思い



【1班】



【2班】



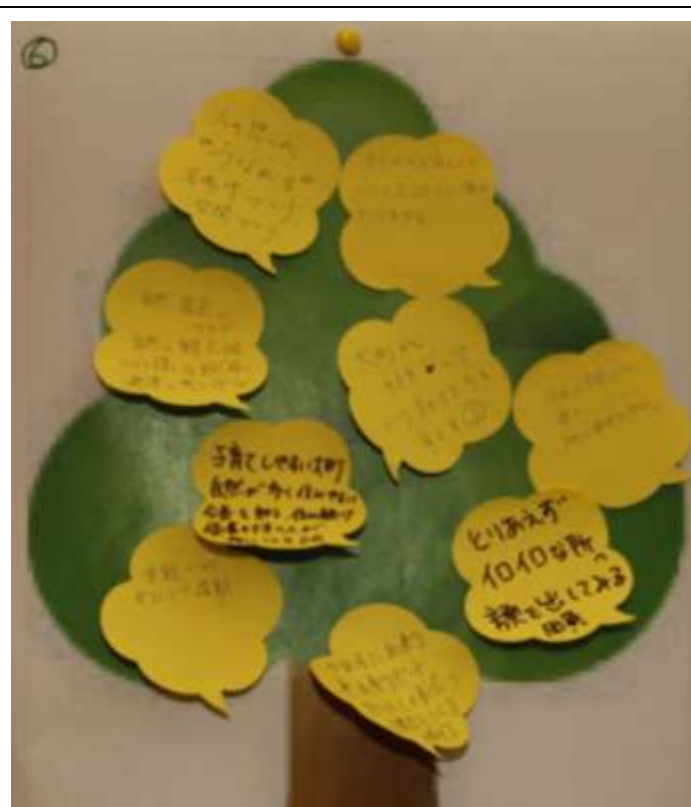
【3班】



【4班】



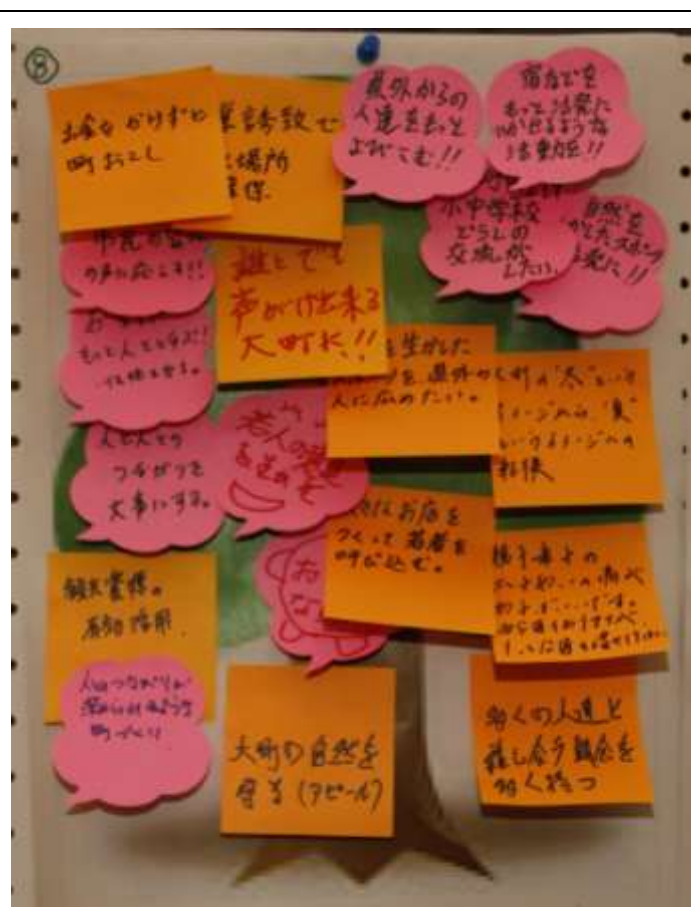
【5班】



【6班】



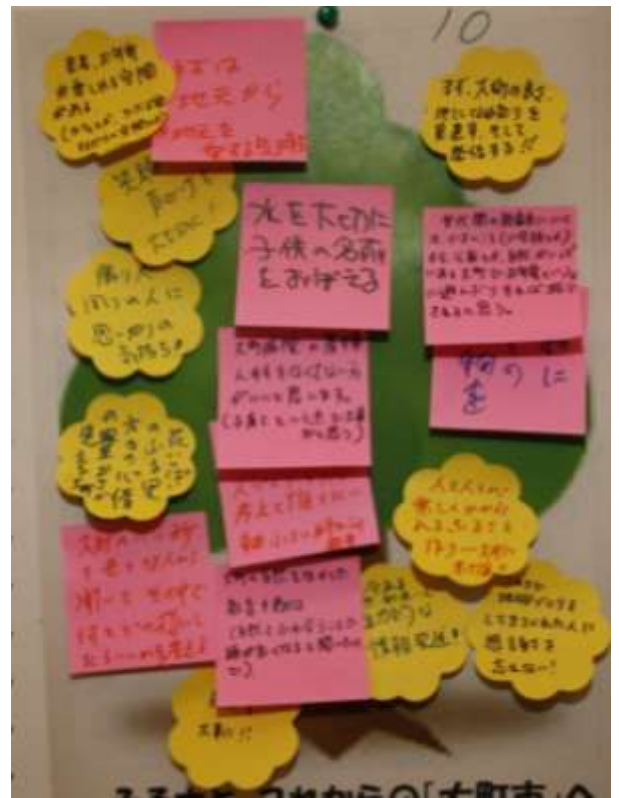
【7班】



【8班】



【9班】



【10班】

会場展示

- 市民活動サポートセンター登録団体、花づくり活動 紹介パネル
- 仁科台中学校3学年 『きらり☆おおまち未来予想図プロジェクト』 (総合的な学習)
- 仁科台中学校 市長への提言書
- 大町西小学校 『みらいの木』(将来の夢・大町の好きなところ)
- 大町第一中学校3学年 農具川清掃活動映像・・・第一中学校3年生の皆さんが農具川の自然観察や清掃活動を伝統として続け、故郷を大切に思う心を育ててきました。生徒の皆さんの活動でごみも減って川がきれいになり、訪れる人を楽しませてくれています。

